

大学病院の緩和ケアを考える会

ニュース・レター Vol. 19 No. 1

平成 26 年 5 月 1 日発行

大学病院の緩和ケアを考える会 事務局

〒142-8555 東京都品川区旗の台 1-5-8 昭和大学医学部 医学教育推進室

E-mail: jimukyoku@da-kanwa.org http://www.da-kanwa.org

編集責任者 高宮有介

- ご挨拶
- 第 20 回総会・研究会開催に向けて
- 準世話人リレー連載：
山梨大学医学部附属病院緩和ケアチームの活動
- 大学病院フォーラムにご参加ください
- 第 28 回日本がん看護学会に参加して
- クールダウン エッセイ



ご挨拶

代表世話人 高宮 有介（昭和大学医学部医学教育推進室）

桜の花も散り、新芽の出る季節となりました。大学や病院には、新人が初々しく行き交っております。皆様の中には移動で、新たな職場でのスタートの方もおられるかもしれ

ませんが、職場は同じですが、過去に縛られず、チャレンジ精神で前に進みたいと思っています。

海外では、いくつかの大学で、Whole Person Care、医療系学生自身のセルフケアが必修化されています。私は、今年 7 月にオーストラリアのモナシュ大学、9 月にカナダの McGill 大学医学部で研修予定です。医療者が自分自身のケアをすることにより、より良いケアを患者さん、ご家族に提供できるのではないのでしょうか。瞑想などは、東洋的なアプローチですが、海外で支持されている背景を学ぶとともに、どのように日本の医療や医学教育に導入するかも模索していきたいと考えています。

れません。私は、職場は同じですが、過去に縛られず、チャレンジ精神で前に進みたいと思っています。

今年の総会・研究会は、日本医科大学武蔵小杉病院が主催です。同病院の赤羽世話人と藤原世話人が当番となり、鋭意準備をしております。日程は、9 月 20 日（土）で、会場は、千駄木にある日本医科大学橋桜会館です。テーマは、「つなごう～大学病院と在宅緩和ケア」です。緩和ケア領域では、地域連携は大きな課題になっております。先進医療を担う大学病院ですが、このテーマを皆様と語り合いたいと存じます。一人でも多くの方の参加を願っております。

昨年、カナダのモントリオールで第 1 回 Whole Person Care 世界大会が開催されました。Whole Person Care の中でも、医療者自身の心のケア、セルフケアが大切な核になっていました。私は、大会に参加し、その後も、医療者自身のケアについて、学びを継続しています。海外では、瞑想やヨガ、音楽療法などを取り入れ、マインドフルネスを提唱しています。マインドフルネスとは、過去は変えられないし、未来

も不確かだが、目の前の今という瞬間、今やるべきことに集中する。仕事や家庭等の様々な悩みもあるかもしれないが、今は横に置いておき、目の前のやるべきことに集中することです。

さて、来年 2015 年の第 20 回記念日本緩和医療学会学術大会の大会長を拝命しています。テーマは、「夢をかなえる～この 20 年、そして、あしたへ～」としました。メッセージは、「この 20 年で、あなた自身の夢は叶ったこともあれば、叶わなかったこともあるでしょう。患者さんのささやかな夢も叶ったかもしれないし、叶わなかったかもしれない。過去を振り返りつつ、これから、明日に向かって、また、夢を追い続けて進んで行こう。」というものです。“夢”というと儚さもありますが、自分のぶれない軸を持って進んでいくプロセスに意味があると考えています。

第 20 回総会・研究会開催に向けて

日本医科大学武蔵小杉病院 赤羽 日出男

2014 年 9 月 20 日（土）に文京区千駄木にあります橋桜会館にて第 20 回総会・研究会を開催させていただきます。日本医科大学の主催は第 14 回（2008 年）以来となりますが、今回は附属病院（病床数 1002）ではな

く武蔵小杉病院（病床数 372）の緩和ケアチームが中心となって運営にあたります。今回のテーマは「つなごう～大学病院と



在宅緩和ケア」といたしました。開催の目的は緩和医療における在宅と大学病院の連携を密にしていくことです。在宅医療はこれからますますその重要性が増して行くのは明白です。QOLを重視しつつ、チーム医療主体の包括的な地域ケアへの発展が展望されています。しかし、その多様性から地域格差、提供できる医療内容の違いなどがその医療機関ごとに異なることも少なくありません。一方、大学病院の緩和医療においても、未だに多くの医療機関で緩和ケアチームの人的整備が必ずしも十分とはいえません。また、主治医や病棟看護師との協働もすべての診療科において円滑に行われているとは限らないとの意見も聞かれます。これら現状の課題を乗り越えて大学病院の緩和ケアを今後発展させていく上で、在宅緩和ケアは非常に重要な選択肢と考えられます。大学病院も在宅医療を担う医療機関もどちらも、患者さんが受けるべき包括的医療の一翼を担うものです。これからは大学病院と在宅との切れ目のない、双方向性の密な連携がさらに重要となってきます。シンポジウムでは日本医科

大学附属四病院から三浦剛史医師、加藤直人 MSW、高仲雅子専門看護師、青山豊子退院調整看護師、また武蔵小杉病院と同じ川崎市中原区で在宅医療に積極的に取り組んでおられる川崎高津診療所院長松井英男先生にご参加いただきました。「もっと近づこう～大学病院と在宅緩和ケア」をテーマに、多職種それぞれの視点からお話いただき、その後フロアの多くの皆様を交えて活発な意見交換を行うことができると考えています。

今回、ランチョンセミナーとして武蔵小杉病院腫瘍内科勝俣範之先生、特別講演にケアタウン小平クリニック院長山崎章郎先生にご講演をお願いいたしました。また、ナースのためのワンポイント講座は順天堂大学附属浦安病院がん治療センター 山口聖子看護師にご講演をお願いいたしました。

ご参加いただいた方にとって少しでも有意義な会となりますよう準備を進めております。多くの方々のご参加をお待ちしております。

☆準世話人リレー連載 大学病院における緩和ケアを考える☆

End-of-Life コミュニケーション：Liverpool と鬼平犯科帳 山梨大学医学部麻酔科 飯嶋哲也



最近、英国 Liverpool 大学で緩和ケアの卒前教育を視察する機会を得た。詳細は『緩和ケア』誌に譲ることをお許しただくとして、ここでは1週間の Liverpool 視察余話とさせていただきます。出発当日、緩和ケアをとことん勉強するぞと意気込んで、新調したスーツケースに「Textbook of Palliative Care」(2.8kg) を突っ込んだ。それで成田の Virgin Atlantic のカウンターでは「Heavy！」と書かれたステッカーをスーツケースに張り付けられ、帰りの Heathrow では40ポンドの追加料金を取られてしまった。

持参した数冊の本の中で、Liverpool 滞在中に一番よく目を通したのは『鬼平犯科帳』第16巻であった。時差ボケで、どうしても眠れない夜に、読み慣れた文庫本が何度もそのピンチを救ってくれた。『鬼平犯科帳』は池波正太郎が昭和50年代を中心に月刊誌に連載していた、今でも根強い人気のある時代小説である。緩和ケア回診中に患者さんの枕元に文庫本が置いてあるのを年に何回か見かけることがある。[火付盗賊改方]長官の長谷川平蔵を主人公とした江戸時代の警察組織をめぐる人間模様の機微は、間違いなく現

代にも通じるものがある。

Liverpool 大学医学部4年生は10年前から4週間の緩和ケア実習を受けている。その中心は毎週水曜日の「コミュニケーションスキル」実習である。end-of-lifeにある患者・家族と、どうやってコミュニケーションをとるのかを理論的に学び、訓練する。翌日からはホスピスや大学病院で実践する。これを4週間繰り返すのである。言語を超えて、患者・家族とのコミュニケーション能力を比較する手段があれば Liverpool 大学の学生は間違いなく世界トップレベルのはずである。

『鬼平犯科帳』のもう一方の主人公は[盗賊]である。第16巻収載の「火付け船頭」は[盗賊]に妻を寝取られた、無口で愛想のない[船頭]が憂さ晴らしに放火をする物語である。無愛想な[船頭]のことを気に入る客もいれば、嫌う客もいる。そこで「世の中というものは、どこまでも相対にできているわけだから、十人の客のすべてに気に入られるとなると、当然、自分というものを無くしてしまわなくてはつとまらぬ。」と池波正太郎は言う。これは end-of-life コミュニケーションにも通じる一文であると思いませんか。





第2回大学病院フォーラム in Kobe

横浜市立大学附属市民総合医療センター 化学療法・緩和ケア部 斎藤真理
(大学病院フォーラム企画担当者)

本年も日本緩和医療学会学術大会のなかで、大学病院の中で展開されている緩和医療について検討するフォーラムが開催されます(6月20日17

時～)。今回は「大学病院における緩和ケア病棟の役割」がテーマとなります。

- *緩和ケア病棟でなければならないことは何か?
- *緩和ケア病棟がなぜ必要なのか?
- *多くの緩和ケア病棟の中で、大学病院にある緩和ケア病棟には特徴があるのか?
- *緩和ケア病棟を持たない大学病院はどうしていったらよいのか?

など、病棟運営、教育・研修、研究の状況などをご報告いただき、今後の課題を共有する企画したいと思います。

藤田保健衛生大学、東北大学、島根大学、山梨大学、久留米大学からスピーカーをお招きしております。

多くの大学病院関係者の皆様にお集まりいただき、聴講、討議、情報交換の場となるよう希望しています。特に第1回の反省から、今回はより多くの大学の方と意見交換したいと座長たちは考えています。

ぜひとも有意義な90分をご一緒しましょう!

昨年の大学病院フォーラムの様子



第28回日本がん看護学会学術集会参加報告

順天堂大学医学部附属順天堂医院 中野真理子

関東が記録的な大雪に見舞われた2月8・9日にかけて、新潟県朱鷺メッセにおいて『「暮らす」を支えるがん看護ー知・技・倫の融合ー』をテーマに第28回日本がん看護学会学術集会が開催されました。新潟も雪でしたが、会場が一か所に集中していたことと大会運営の方々のご配慮により、大きな混乱なく学会に集中して参加することができました。

今回の学会に参加して感じたことは大きく2つあります。1つは研究発表や講演で取り上げられるテーマの変化です。今までは、症状緩和など緩和ケアに関すること、抗がん剤治療を中心とした治療やその副作用症状マネジメントのこと、などが主体になっていました。今回は、このようなテーマに加えてがん患者の就労支援やセクシュアリティ等のテーマが目につきました。これは、近年ではがん治療が進歩しがんサバイバーが増加していることや生活しながらがん治療を受ける患者が増加していることの表れであると

思います。また、がん対策基本法やがん診療連携拠点病院設置によりがん医療・がん看護の底上げがなされたことにより、今まではクローズアップされていなかった問題、触れたくても触れることができなかった問題が取り上げられるようになってきたのではないかと思います。私自身も、今年ががん患者の就労支援や治療に伴うアピアランスケア(外見関連支援)などを所属施設でどのように行うかが課題と考えています。就労支援・セクシュアリティ・アピアランスケアなど、治療には直接影響はないかもしれませんが患者さんのQOLには大きく影響する部分です。いずれも看護師の力だけで解決できる問題ではないと思いますが、患者さんの身近にいて一番多く接する看護師だからこそこのような問題を察知し看護の力を発揮し支援で



きるのではないかと思います。

2つ目には、がん看護学会に参加する看護師のそ野が広がっているということです。数年前までは、大学の教員や院生、認定・専門看護師などの参加が大半を占めていたと思います。しかし、今回病棟や外来の臨床の場で実践している看護師の参加や発表の増

加を感じました。これは、がん看護の均てん化・質の向上・意識の向上の表れであると実感します。今回の学会に参加し、ますますの自己研鑽を行い、また各看護師や多職種と協働してよりがん看護の質を高めていきたいと刺激を受ける良い機会となりました。

〇●クールダウン～東京オリンピック開催に向けて〇●

社会医療法人社団 順江会 江東病院 副院長 三浦 邦久

江東区は今東京オリンピック効果なのか、特に豊洲周辺がマンションや道路工事が盛んに行われており、以前に比すごく街に活気がある様にみえます。

東京オリンピックの招致が決まった頃を思い出してみると、東日本大震災が起こり、復興支援に向けて私は厚生労働省・東京電力から依頼され福島原発第1

事案以降、毎年東京マラソン 15km 地点で医療救護を行っております。また、松村さんが東京マラソンで AED など用いた心肺蘇生法で助かった年から東京防災救急協会共に江東区医師会主催で区民向けの講習会の講師も行なっています。

オリンピック開催種目内約半数の種目が江東区で

救急医療室勤務を行っていた頃、東京オリンピックが最終候補の1つになったことを知りましたが、東京がかなり厳しい状態とっていました。そんな中東京にオリンピック招致が決定した日は、東京都医師会主催キッズホスピタルで#7119 ピアール活動の為、東京スカイツリーのソラマチ会場へ向かう際に、号外をもらい東京オリンピックが開催される事を知り驚いた事を覚えています。



昨年、東京で国体を行なわれた際も東京都・江東区医師会の依頼で私も若洲でヨットの医療救護に行いました。また江東区のビックサイトは東京マラソンのゴールであり、以前東京マラソン 13km 地点でタレントの松村さんが心肺停止になり、私達が心肺蘇生術を行いながら搬送、蘇生した関係か分かりませんがその

開催される事もあり、江東区医師会防災部会の先生方はオリンピックの医療救護が出来るかもしれないと考えて盛り上がっていますが、今後今まで行ってきた AED 講習以外にテロに対する教育も重要になってくると思います。しかし、もっと大切な事は人と人のつながりです。実際には今以上に他医療機関の連携が重要になってきます。不測事態に陥っても常日頃からお互い顔が見える関係になっていけば、お互いに助け合って解決出来るのではないかと思います。私は医療連携をテーマに6月7日に東陽町駅付近の江東区医師会館で開催する第14回日本高気圧環境・潜水医学会関東地方会学術集会の会長を務めるので、是非皆様来て下さい。

クールダウンエッセイを会員から募集します！

これまで、ニュース・レターのクールダウンエッセイは世話人が担当して参りましたが、次号から会員の皆様からも募集いたします。「趣味の話」「最近興味があること」「旅行記」「みんなに聞いてほしい話」「宣伝を兼ねて紹介したいこと」等々、皆様からの原稿を奮ってご応募ください。

<応募要領>

お名前、ご所属、テーマ、原稿（900字程度）、執筆者の写真をメールで事務局までお送りください。大学病院の緩和ケアを考える会事務局 メールアドレス：jimukyoku@da-kanwa.org

尚、応募者多数の場合は、ニュース・レター編集担当世話人、代表世話人による厳正な審査の上、掲載いたします。応募メール受け取り後に確認メールをお送りし、掲載が決定しましたらご連絡いたします。落選の場合はご連絡いたしません。ご応募、お待ちしております！！

